



Title	バスク語における語尾-kaの付く語の統語的特徴 : 動詞 egin「する」と共起する場合
Author(s)	手塚, 進
Citation	Estudios Hispánicos. 2020, 44, p. 123-146
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98053
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

バスク語における語尾-*ka* の付く語の統語的特徴

——動詞 *egin* 「する」と共起する場合——

手 塚 進

1. はじめに

本稿は、バスク語の形態統語論に関する研究である。バスク語には-*ka* という語尾があり、先行研究において、この語尾は副詞を派生させる接尾辞であるとされてきた。しかしながら、この語尾をめぐっては、派生された語を副詞として分析することが妥当であるか、かならずしも明らかではない。本稿では、この語の品詞分類をめぐって議論することを目的とする。

品詞分類の議論を深めるためには、様々な統語環境における当該語の文法的特徴を明らかにしなければならない。なぜなら、ある語の品詞を決定するために必要なのは、複数の文法的特徴の束であり、それらを総合的に考慮して当該語の品詞が決まるからである (Schachter, 1985: 6)。

そこで本稿では、語尾-*ka* が後接している語 (以下、-*ka* が後接することで生じる語を *X-ka* と表記する) の統語的特徴について議論する。分析するのは、*X-ka* と他動詞 *egin* 「する」が共起する場合の用例であり、この環境において、*X-ka* は典型的な副詞らしくないふるまいを見せる。本稿の結論は次の2点である：

- (i) *egin* と共起する場合、*X-ka* の用法は統語的観点から3種類に分類される。
- (ii) これらの用法の副詞らしさの程度には差がある。

本稿の構成は次のとおりである。まず第2節において、先行研究における語尾-*ka* の記述と、バスク語における一般的な副詞の定義を概観し、その後で *X-ka* を副詞とみなすことの問題点を確認する。次に第3節において、本稿で分析される統語環境についての先行研究を確認する。そのあと第4節にお

いて本稿の仮説を提示し、第5節以降では、コーパスから採集した用例の分析と考察をおこなう。

2. 語尾-ka

本節では、X-ka が副詞派生接尾辞として記述されてきたことを確認したあと、その分析に議論の余地があることを示す。

2.1. 先行研究

はじめに、先行研究の記述を確認する。Euskaltzaindia (1985) および Hualde (2003) によれば、-ka は副詞を派生する接尾辞であるという。この接尾辞は、名詞、動詞、形容詞、限定詞など、様々な品詞の語に接続することがある。以下では、いくつか X-ka の例を見ていく。まず、語基が名詞である X-ka として (1) のような例があげられる。これらの語は、道具や様態を表す副詞になる。

(1) <u>名詞</u>	<u>-ka 副詞</u> ¹
<i>pelota</i> ‘ball’	<i>pelota-ka</i> ‘playing ball’
<i>harri</i> ‘stone’	<i>harri-ka</i> ‘throwing stones’
<i>esku</i> ‘hand’	<i>esku-ka</i> ‘with the hand (e.g. playing ball)’
<i>salto</i> ‘jump’	<i>salto-ka</i> ‘jumping’
<i>musu</i> ‘kiss’	<i>musu-ka</i> ‘kissing’

次に、動詞が X-ka の語基として使用される例は (2) である。これらの語は、名詞の場合と同様に、様態副詞になる。

(2) <u>動詞</u>	<u>-ka 副詞</u>
<i>korri-tu</i> ‘run’	<i>korri-ka</i> ‘running’
<i>bultzatu</i> ‘push’	<i>bultzaka</i> ‘pushing’
<i>jo</i> ‘hit’	<i>jo-ka</i> ‘hitting (<i>ate-joka</i> ‘knocking at the door’)
<i>esa-n</i> ‘say’	<i>esa-ka</i> ‘saying’ (<i>gaizki esaka</i> ‘speaking badly, bad-mouthing’)

1 (1) (2) (3) は Hualde (2003 : 348-349) より引用。

また、名詞や数詞などに後接することで、反復や分布 (“distribution”)² を表す場合もある。その例として (3) があげられている。

(3) 語基	-ka 副詞
<i>talde</i> ‘group’	<i>taldeka</i> ‘in group’
<i>bana</i> ‘one for each’	<i>banaka</i> ‘individually, one by one’
<i>bina</i> ‘two for each’	<i>binaka</i> ‘in groups of two, two by two’
<i>epe</i> ‘period’	<i>epeka</i> ‘periodically’
<i>hilabete</i> ‘month’	<i>hilabeteka</i> ‘monthly’
<i>urte</i> ‘year’	<i>urteka</i> ‘yearly’

以上のように、語尾-ka は、副詞を派生する接尾辞であるとされてきた。

しかしながら、こうした副詞用法のほかに、名詞としての用法もあるといわれている。たとえば、Euskaltzaindia (1985: 334) は、X-ka の名詞用法の例として (4) をあげている。(4) a の *banaka* には限定詞 *batzuk* 「いくつかの」が³、(4) b の (*gaizki*) *esaka* には指示詞 *haiek* 「あれらの」が後置されていることから、名詞として機能していると考えられる。

(4)	a.	<i>bana</i>	-ka	<i>batzuk</i>	「いくつか」	
		ひとつずつ		いくつかの		
	b.	<i>gaizki</i>	<i>esa</i>	-ka	<i>haiek</i>	「あれらの悪口」
		悪く	言う		あれらの	

こうした名詞用法について、Euskaltzaindia は「X-ka はしばしば名詞化される」(“Nominalizatu ere sarritan egiten dira [...]” [*Ibid.*]) と述べている。この記述から、名詞用法は派生的なものであり、あくまで X-ka は本来的に副詞であると考えていることがうかがえる。

次節では、X-ka が副詞と解釈されるための根拠を明確にするため、バスク語における副詞の定義を確認する。

2 ここでいう「分布」とは、*taldeka* や *banaka* のように、ある行為の主体が複数存在し、それらが何人ずつに分かれて当該行為をおこなうのかといった、複数主体の人数配分に関するものであると思われる。

2.2. 副詞の定義

以下では、Euskaltzaindia (1985) から、副詞の定義を確認する。その後、Zabala *et al.* (1994) が提示している X-ka の特徴を確認する。

a) Euskaltzaindia (1985)

Euskaltzaindia は、副詞の特徴として (A) に示した 3 種類をあげている。

- (A) i. 生起が義務的でない。
ii. 限定詞をともしなわない。
iii. 格標識をともしなわない。

まず (A)i について確認する。副詞の特徴のひとつは、その生起が義務でないことである。たとえば (5) は、丸カッコ内の語の有無にかかわらず容認される。

- [illegible]

「私たちは（昨日）（ここで）狼を見た」

次に (A) ii について述べる。副詞は限定辞をとまなわない。その証拠として、(6) は容認されない。

- (6) a. **atzo* {=*a* / =*ak*}
昨日 ABS.SG ABS.PL

3 Euskaltzaindia (1985:311) より一部省略して引用。斜体、グロス、日本語訳は筆者による。

4 AUX は助動詞 (auxiliary) の意味である。バスク語の動詞人称形には助動詞がともなうことが一般的であり、助動詞には、動詞の補語の人称と数が標示される。たとえば (5) では、助動詞 *genuen* の形態から、動詞 *ikusi* には絶対格補語と能格補語が存在し、それぞれ 3 SG と 1 PL であることがわかる。

- b. **ederki* {=*a* / =*ak*}
 よく ABS.SG ABS.PL
 c. **atzo* *hau*
 昨日 これ.ABS.SG

最後に、(A) iii の特徴を確認する。副詞は格標識をとらない。そのため、(7) のような語は容認されない。

- (7) **atzo* = *k*, **horrela* = *ri*, **ederki* = *ren*
 昨日 = ERG.IND そのように = DAT.SG よく = POSS.IND

Euskaltzaindia は、上記 3 種類の特徴が副詞の特徴であるとしている。

b) Zabala *et al.* (1994)

Zabala *et al.* は生成文法の立場から、Euskaltzaindia が提示する副詞の特徴づけの問題点を指摘している。以下では、X-*ka* を含む様態派生副詞に関する記述を確認する。様態派生副詞とは、派生副詞のうち、特に動詞の表す行為の様態について言及する副詞を意味する。

様態派生副詞として、Zabala *et al.* は (8) のような例をあげている。

- (8) a. *eder* -*ki* 「よく」
 よい
 b. *harri* -*ka* 「石で、石を投げて」
 石
 c. *asti* -*ro* 「毎週」
 週

このうち、-*ki*, -*ro* などをとともなう副詞は、(9) に示したように、動詞の表すイベントを修飾することが普通である。たとえば (9) a では *astiro* が *egin* を修飾し、「仕事をする」というイベントの頻度に関する情報を追加している。また、(9) b では *ederki* が *idatzi* を修飾し、書き方の上手さを述べている。

- (9) a. Lan hori astiro egi-n behar da
仕事 その.ABS.SG 毎週 する-PRF べき AUX
ABS (3 SG)

「その仕事は毎週されなければならない」

- b. Ederki idatz-i duzu azaldu dizugu -n ideia
よく 書く-PRF AUX 私たちが君に説明した RELZ 考え.SG.ABS
ABS (3 SG)
ERG (2 SG)

「あなたは私たちが君に説明した考えを上手に文章にした」

したがって、これらは副詞であると結論づけている。

その一方で、X-ka については副詞ではないと結論づけており、その理由として、一部の X-ka が動詞の表すイベントを修飾することなく、むしろ述語として機能するためであると述べている。たとえば (10) において、keinuka はあるイベントの様態を修飾しておらず、むしろ keinuka 自体によって Jon を主語とするイベントの内容が決定されている。

- (10) Jon keinu -ka dago 「Jon はウィンクをしている」
ウィンク COP.3 SG

このことから Zabala *et al.* は、ほかの様態派生副詞と区別して、X-ka を後置詞句として分析することを提案している。

2.3. X-ka を副詞とみなすことの問題点

本節では、Euskaltzaindia (1985) と Zabala *et al.* (1994) の記述をふまえて、X-ka を副詞と分類することの問題点をまとめる。議論の焦点として次の3つがあげられる。

- (i) X-ka は副詞の特徴を部分的にしか満たさない。
- (ii) X-ka を後置詞句として分析する可能性も残されている。
- (iii) 例外的な名詞用法が散見する。

- (i) X-ka は副詞の特徴を部分的にしか満たさない。

X-*ka* は、2.2.a) で示した3種類の特徴のうち、「義務的でない」を満たさないことがある。b) で確認したように、X-*ka* が叙述用法で用いられる場合、削除すれば非文である。また、叙述用法の場合、一般的な動詞と同様にイベントを表すことから、動詞の表すイベントを修飾しているとはいえず、典型的な副詞とは異なる。

(ii) X-*ka* を後置詞句として分析する可能性も残されている。

2.2.b) で確認したように、X-*ka* が一語であると考えする必要はかならずしもない。仮に-*ka* が後置詞であるとすれば、X-*ka* は後置詞句として分析される。このように、X-*ka* を語として考えない場合、品詞分類を問題にする意味がなくなってしまう。

(iii) 例外的な名詞用法が散見する。

2.1 節で確認したように、X-*ka* は、例外的ではあるものの、名詞らしい統語的特徴を示すことがある。そのため、仮に X-*ka* を副詞と定義した場合、名詞用法がなぜ、どのような条件で可能なかを説明しなければならない。

このように、X-*ka* の品詞分類については議論の余地があり、そのためには X-*ka* に関する統語現象の記述がさらに必要である。とりわけ、典型的な副詞とは異なる特徴を観察することで、当該語の特徴がより明確になるはずである。

3. 分析対象

3.1. 概観

以下では、本稿の分析対象である (i), (ii) のペアについて説明する。

- (i) X-*ka*
- (ii) 他動詞 *egin* 「する」

まず、それぞれの意味を確認するが、(i) についてはすでに第2節で確認したため、ここでは (ii) についてのみ述べる。*egin* は「する」を意味する他動詞であり、通常は絶対格補語として名詞を要求する⁵。たとえば (11) で

は、*Lan ederra* 「よい仕事」が *egin* の絶対格補語として機能している。

- (11) *Lan eder = ra egi-n duzu.*⁶
 仕事 よい = SG.ABS する-PRF AUX
 ABS (3 SG)
 ERG (2 SG)

「あなたはよい仕事をした」

次に、(i) (ii) のペアの特殊性について述べる。第2節で述べたように、異論はありつつも、*X-ka* は一般的に副詞と考えられている。しかしながら、当該ペアについては、*X-ka* が副詞であると想定すると、説明の難しい場合がある。

たとえば (12) を分析する。この文は「彼らがジャンプした」という意味である。

- (12) *Salto -ka egi-n dute* “They jumped.”⁷
 ジャンプ する-PRF AUX
 ABS (3 SG)
 ERG (3 PL)

このうち「ジャンプする」は *saltoka egin* によって表現されており、主語が 3 PL であるという情報は、助動詞 *dute* に含まれている。ここで、*egin* が他動詞であると考えれば、その絶対格補語として名詞が要求されると予測され

5 EH 辞書は、*egin* の意味として以下の項目をあげている。*egin* の意味は多く、文脈に依存するため、本研究では日本語訳を「する」とした。

(i) 生み出す；(ii) 作る；(iii) [食事の文脈で] 食事をする；(iv) [歳の話で] 歳をとる；(v) [時間の話で] 時間がたつ；(vi) 変化させる；(vii) [天候を表す]；(viii) 遊ぶ；(ix) 賭ける；(x) [言語の話で] 話す；(xi) [*egin dezagun (kontu)* の形で] ～と想定しよう；(xii) [*-ena egin* の形で] ～の格好をする；(xiii) ある場所に向かう、ある場所から去る；(xiv) ～なように思える；(xv) 環境に慣れる；(xvi) [不定詞とともに現れ、その不定詞が文の焦点であることを示す]；(xvii) [形容詞用法で] 成熟した。

6 EH 辞書、*egin*¹ の語義 1 の用例より引用。グロスは発表者による。

7 Etxepare (2003: 397) の用例と英語訳を、一部変更して引用。グロスはすべて筆者による。

る。ところが (12) には名詞がなく、そのかわりに *saltoka* が生起している。

このように、副詞であるはずの *X-ka* が、*egin* の絶対格補語として機能しているようにみえることが、分析対象のペアの特徴である。次節では、この組み合わせに関する先行研究を確認する。

3.2. 《X-ka + egin》の先行研究

X-ka と *egin* の組み合わせについて、先行研究では (13) のような例が示されている。

(13) <i>X-ka</i>	<i>X-ka</i> の意味	<i>egin</i> と組み合わせたときの意味 ⁸
<i>borbor-ka</i>	沸騰して	沸騰する
<i>laster-ka</i>	急いで、走って	走る
<i>salto-ka</i>	飛び跳ねて	跳ぶ
<i>atzapar-ka</i>	ひっかいて	ひっかく
<i>eztul-ka</i>	咳をしながら	咳をする
<i>jauzi-ka</i>	飛び跳ねて	飛び跳ねる
<i>korri-ka</i>	走りながら	走る

先行研究⁹は、*X-ka* が副詞であると認めたうえで、この語が *egin* の絶対格補語として機能するようにみえる用法を、特別な構文として記述している（以下では、この構文を《*X-ka* + *egin*》と表記する）。

また、この構文は、次節で確認する《名詞 + *egin*》の変種として扱われてきた。以下では、《名詞 + *egin*》構文の特徴を確認する。

3.3. 《名詞 + egin》

バスク語では、*egin* と名詞を組み合わせることで、生産的に述語がつくられる（以下では、《名詞 + *egin*》と表記する）。例として (14) のような組み合わせがある。

8 Martinez Etxarri (2015: 124-125) より例のみ引用。日本語訳は発表者。

9 Acedo-Matellán *et al.* (2019) ; Artiagoitia (2012) ; Etxepare (2003) ; Martinez Etxarri (2015).

(14) 《名詞 + <i>egin</i> 》	名詞の意味	構文の意味 ¹⁰
a. <i>barre egin</i>	laugh	to laugh
b. <i>hitz egin</i>	word	speak
c. <i>ihes egin</i>	escape	to escape
d. <i>lan egin</i>	work	to work
e. <i>lo egin</i>	sleep	to sleep
f. <i>negar egin</i>	tear	to cry
g. <i>oihu egin</i>	shout	to shout

たとえば (14) a を見ると、「笑う」というイベントを表すために、名詞 *barre* と動詞 *egin* の2要素を用いていることがわかる。このように、イベントを一語の動詞ではなく、名詞と *egin* のペアによって表現する方法がバスク語では生産的であると考えられる¹¹。

3.4. 《X-ka + *egin*》と《名詞 + *egin*》の関係

《X-ka + *egin*》に関する記述がみられるのは、《名詞 + *egin*》について述べられているときである。それによれば、《名詞 + *egin*》は、名詞以外の品詞をとることも可能であり、そのひとつが《X-ka + *egin*》であるという。このことから、《X-ka + *egin*》が《名詞 + *egin*》の変種として記述されていることがわかる。

しかしながら、両構文にどのような統語的差異があるのかについての言及

10 (14) は Levin (1983:304-305) より引用。

11 《名詞 + *egin*》に含まれる2要素は決して一語ではなく、統語的に独立している。このとき名詞は *egin* の絶対格補語として機能している。その証拠として Ettxepare (2003:397) は (i) を提示している。(i) a では *dantza egin* が連続しているのに対して、(i) b では2要素が分離し、語順も変わっている。これは絶対格名詞句と同様のふるまいであるという。

(i) a. *Jon = ek dantza = φ egi-n du.* 「Jon は踊った」¹¹
 Jon = ERG ダンス = IND.ABS する-PRF AUX
 ABS (3 SG)
 ERG (3 SG)

b. *Nork egi-n du dantza = φ?* (Wh-疑問文)
 誰.ERG する-PRF AUX ダンス = IND.ABS
 ABS (3 SG)
 ERG (3 SG)

「誰が踊ったのか？」

は見当たらない¹²。次節以降では、《*X-ka + egin*》について、《名詞 + *egin*》には観察されない特別な統語的特徴があるという仮説を提示し、用例を分析する。

4. 仮説

3.4 節で確認したように、先行研究において《*X-ka + egin*》は《名詞 + *egin*》の変種であると考えられている。このことを踏まえて、ふたつの予測 (B) (C) をたてる。

4.1. 予測 (B)

(B) もし《名詞 + *egin*》内の名詞が名詞として機能するように、《*X-ka + egin*》内の *X-ka* が副詞として機能するならば、《*X-ka + egin*》は新たな絶対格補語を容認する。

予測 (B) の根拠は以下のとおりである。

まずは《名詞 + *egin*》の統語的特徴について確認する。先行研究にしたがえば、この構文を構成する2要素は統語的に独立しており、名詞は名詞としての統語機能を保持していると考えられる。予測 (B) は、《名詞 + *egin*》のこうした統語的独立性が、《名詞 + *egin*》と《*X-ka + egin*》の共通点であると仮定することで得られるものである。つまり、《*X-ka + egin*》内の *X-ka* が、本来的な副詞としての機能を保持していると仮定するのである。

このように仮定すると、《名詞 + *egin*》と《*X-ka + egin*》には、動詞 *egin* の絶対格補語スロットの埋まり方について、大きな差異が生じると予測され

12 両構文の意味的差異については、Etxepare (2003) が以下のような指摘をしている。それによれば、《名詞 + *egin*》と比較すると、《*X-ka + egin*》は反復の意味を帯びるという。引用部分の下線は発表者による。1行目にある “those complex predicates” は《名詞 + *egin*》を指す。また、2行目に “the one above with a locative or adverbial complement” とあるが、これは動詞 *egin* が locative or adverbial complement をとる構造を指している。

“[. . .] some of those complex predicates admit, but do not require, a structure such as the one above with a locative or adverbial complement [. . .] In these cases, the event denoted by the complex predicate takes on an iterative meaning: it is implied that those events happened once and again in a given time.” [Etxepare (2003 : 396-397)]

る。まず《名詞+egin》の場合には、すでに構文内に絶対格名詞がひとつあるため、新たな絶対格名詞句を容認することはないと考えられる。

それに対して《X-ka+egin》の場合には、新たに絶対格名詞句が^seginの補語として生起しても問題ないと予測される。なぜならX-kaは副詞であり、絶対格補語にはならないと考えられるからである。

ここで、第5節の内容を先取りすることになるが、予測(B)が予測する表現の具体例として、(15)のような例を分析する。

- (15) [Atzeko hanka falta duen]_{REL.CL} zakur nabar bat = ek
 後ろ足の片方がない 犬 野良の 1 ERG
 jauzi-ka egi-n du [bi etxe-ren arte = ko tarte]_{NP} = a.¹³
 跳躍-ADVZ する-PRF AUX 2 家-GEN 間=GEN 空間 SG.ABS
 「[後ろ足の片方がない]_{REL.CL} 一匹の野良犬が、[2軒の家の間の空間]_{NP}を跳び回っていた」

(15)の文構造は次のとおりである。動詞はeginであり、その直前にjauzi-ka「跳びまわって」がある。eginの能格補語はantzeko hanka falta duen zakur nabar batek「後ろ足の片方がない一匹の野良犬」であり、絶対格補語はbi etxeren arteko tarte「2軒の家の間の空間」である。

このとき、eginの絶対格補語スロットを埋めていないという意味において、jauzikaは副詞らしいといえる。しかしながら、jauzikaは典型的な副詞と異なり、動詞の表すイベントを修飾しているわけではない。むしろ、(15)の表すイベントの内容を決めているのはjauzikaであると考えられ、その意味では、jauzikaは副詞らしいとはいえない。さらに、jauzikaがなければ、この絶対格名詞句はeginの補語になれないと考えられるため、jauzikaは削除することができない。

このように、eginがふたつの名詞を補語としてとりつつ、X-kaがeginにとって必須であるような用例が、予測(B)の予測する表現である。

4.2. 予測(C)

さて、ここまで予測(B)を確認したが、《X-ka+egin》が《名詞+egin》

13 P. Lizarralde, *Iragaitzaz —ilunbistan—*, 2008, Erein, p.82. [EPD コーパス]

の変種であるとするれば、以下のような予測 (C) をたてることも可能である。

- (C) 《X-ka + egin》内の X-ka が名詞として機能することがある。その場合には、《X-ka + egin》はあらたに絶対格名詞を容認することができない。

つまり、《X-ka + egin》を構成する X-ka は、《名詞 + egin》内の名詞と同様に、egin の絶対格補語スロットを埋めると考えられる。

4.3. 仮説 (D)

さて、予測 (B) と予測 (C)、および、第 2 節で確認した X-ka の副詞としての機能を踏まえて、egin と共起する場合の X-ka の機能が 3 種類に分類されるという仮説 (D) をたてる。

(D) 仮説：-ka 副詞と egin が共起する文脈の分類

(D1) X-ka が一般的な副詞として機能する場合

(D2) X-ka が《X-ka + egin》を構成し、egin が絶対格名詞句をとらない場合

(D3) X-ka が《X-ka + egin》を構成するものの、egin が絶対格名詞句をとる場合

まず (D1) は、第 2 節で確認した、動詞の修飾語としての X-ka である。この場合の X-ka は義務的ではなく、削除しても文の容認性に影響を与えない。(D1) の用例は、5.1 節 a) および 5.2 節 c) において分析される。

次に (D2) は、予測 (C) が予測する X-ka の用法である。この場合、X-ka が egin の絶対格補語スロットを埋めているようにみえるという点において、名詞らしいといえる。(D2) の用例は、5.2 節 d) で分析する。

最後に (D3) は、予測 (B) で述べたように、egin の補語にはならないものの、egin の必須要素であるため削除不可能な場合である。(D3) の用例は、5.1 節 b) で分析する。

次節では、コーパスからの用例を使用し、仮説 (D) の分類が可能であるかを検証する。

5. 分析

以下では、*X-ka* と *egin* が共起する用例を EPD コーパス¹⁴ を用いて採集し、それらを仮説 (D) にもとづいて分類する¹⁵。検索条件は (E) のとおりである。

(E) 検索条件

1 語め：接尾辞-*ka* をもつ語¹⁶

2 語め：*egin* (LEMA)

2 語間の距離：1 語 (つまり、間にほかの語が入らない。また、語順は固定)
媒体：本 (バスク語原作のみ。翻訳は除く)

年代：2004-2017

この検索によるヒット数は 347 件であった。これらの用例を、以下の 3 グループに分類する。

- (i) *X-ka* を含み、かつ *egin* を中心とする節の中に、絶対格名詞句が明示されている用例群
- (ii) *X-ka* を含み、かつ *egin* を中心とする節の中に、絶対格名詞句が明示されていない用例群
- (iii) *X-ka* が *egin* を中心とする節の中に含まれない用例群。または、そもそも検索条件を満たしていない用例群

このうち、(i) は 5.1 節で、(ii) は 5.2 節で分析する。なお、(iii) については、*X-ka* と *egin* との間に依存関係が存在しないため、分析対象から除外す

14 2004 年～2017 年に出版された本と新聞 (それぞれ 1:1 の割合) からなるコーパス。規模は約 4,200 万語。

15 分析対象となる用例のうち、2013 年から 2017 年までのものについては、手塚 (2019) で分析した。また、5.1 節 b) の「容認型」および 5.2 節 d) の「拒絶型」についても、この発表ですでに提案されている。

16 検索条件を満たすと思われる語連続のいくつかは、適切に抽出できていなかった。たとえば *korrika egin* 「走る」や *hozka egin* 「嘔む」などは頻出表現であるものの、検索結果には現れなかった。

る。

5.1. X-ka を含み、かつ *egin* を中心とする節の中に、絶対格名詞句が明示されている用例群

この節では、*egin* を中心とする節があり、その節内に *X-ka* があり、さらに絶対格名詞句がひとつある場合である。このような用例は、a) と b) のふたつに分類できる。

- a) *X-ka* が一般的な副詞として機能する場合 (=D 1)
- b) *X-ka* が《*X-ka + egin*》を構成するものの、*egin* が絶対格名詞句をとる場合 (=D 3)

- a) X-ka が一般的な副詞として機能する場合 (=D 1)

この用例において、X-ka は一般的な副詞として機能している。ここでいう一般的な副詞とは、動詞の修飾語であり、生起が義務的ではないという意味である。たとえば (16) では、*algaraka* 「大きな声で」が *barre egin* 「笑う」を修飾している。その際、*algaraka* は笑い声の大きさを具体的に説明しているだけであり、*barre egin* にとって必須要素であるとは考えられない。

- (16) *Algara -ka egi-n genuen barre = φ.*¹⁷
 大笑い する-PRF AUX 笑い=IND.ABS
 ABS (3 SG)
 ERG (1 PL)

「私たちは大きな声で笑った」

- b) *X-ka* が《*X-ka + egin*》を構成するものの、*egin* が絶対格名詞句をとる場合 (=D 3)

このグループは、*egin* がふたつの名詞句をとりながら、*X-ka* が必須であるような用例である。4.2 節で確認したように、たとえば (17) では、かりに *jauzika* がなければ、*egin* が絶対格補語として *bi etxeren arteko tartea* を

17 U. Alberdi, *Jenisjoplin*, 2017, p.229. [EPD コーパス]

支配することはないと考えられる。その意味において、*jauzika* は *egin* の必須要素といえる。

- (17) [= (15)] [Atzeko hanka falta duen]_{REL.CL} zakur nabar bat = ek
 後ろ足の片方がない 犬 野良の 1 ERG
*jauzi -ka egi-n du [bi etxe-ren arte-ko tarte]*_{NP} = a.
 跳躍 する-PRF AUX 2 家-GEN 間-GEN 空間 SG.ABS
 ABS (3 SG)
 ERG (3 SG)
 「[後ろ足の片方がない]_{REL.CL} 野良犬が一匹、[2 軒の家の間の空間]_{NP} を飛び回っていた」

同様の関係が (18) にもあてはまる。この例文において、*egin* の絶対格補語は *azken hamar metroak* 「最後の 10 メートル」である。

- (18) *Presa -ka egi-n zituen azken hamar metro = ak* [...] ¹⁸
 急ぎ する-PRF AUX 最後の 10 メートル PL.ABS
 ABS (3 PL)
 ERG (3 SG)
 「[...] 彼は最後の 10 m を急いだ」

azken hamar metroak は主語（彼）が移動する距離を表す名詞句であるものの、*egin* 自体には移動の意味がないため、両者は意味的にミスマッチである。こうしたミスマッチにもかかわらず、この名詞句が *egin* の絶対格補語として機能できる理由は、*presaka* が生起しているからである。つまり、*presaka* と *egin* が《X-ka+egin》を構成することで、構文として移動の意味が表れるため、意味的なミスマッチが解消されと考えられる。この意味で、*presaka* は *egin* の絶対格補語スロットを埋めていないものの、*egin* の必須要素であるといえる。

さらに、同様の例をもうひとつ提示しておく。(19) においても、絶対格名詞句 *geltokirainoko tartea* 「駅までの間」が *egin* の絶対格補語として機能

18 I. Araque, *Damutzen ez direnak*, 2012, Elkar, p.62. [EPD コーパス]

できる理由は、*egin* が *balantzaka* 「グラグラしながら」によって修飾されているためであると考えられる。

- (19) [...] *balantza -ka egi-n zuten* [*geltoki = raino = ko tarte*]_{NP = a}.¹⁹
 バランス する-PRF AUX 駅=まで=GEN 空間 SG.ABS
 ABS (3 SG)
 ERG (3 PL)

「彼らはぐらぐらしながら駅までの間を歩いた」

このように、《*X-ka + egin*》がふたつの名詞句を支配する用例を、「容認型《*X-ka + egin*》」と呼ぶことにする。(20) に提示する組み合わせは、今回観察した用例のなかで、(17) (18) (19) と同様の用法であるように思われる例文から、*X-ka* および絶対格名詞句だけを提示したものである。

(20) 容認型《*X-ka + egin*》の組み合わせ

<u><i>X-ka</i></u>	<u>絶対格名詞句</u>
a. <i>presa -ka</i> 「急いで」 急ぎ	<i>pauso bakan = ak</i> 「ほんの数歩」 一歩 わずかな = PL.ABS
b. <i>gaizki erran -ka</i> 悪く 言う 「悪口を言いながら」	<i>bide = aren zati = rik handien = a</i> 道 = SG.GEN 部分 = PRT 最大の = SG.ABS 「道の大部分」
c. <i>balantza -ka</i> バランス 「グラグラしながら」	<i>ate = ra = ko bide = a</i> 「扉への道」 扉 = ALL = GEN 道 = SG.ABS
d. <i>bakar-ka</i> 「ひとりで」 ひとり	<i>ibilbide guzti = a</i> 「全行程」 行程 すべて = SG.ABS

5.2. *X-ka* を含み、かつ *egin* を中心とする節の中に、絶対格名詞句が明示されていない用例群

この節では、*egin* を中心とする節があるものの、絶対格名詞句がなく、*X-ka* がある用例を分析する。このような用例は、以下の3グループに分類で

19 P. Lizarralde, *Orbanak*, 2012, Erein, p.107. [EPD コーパス]

- c) X-ka が一般的な副詞として機能する場合 (=D 1)
- d) X-ka が《X-ka + *egin*》を構成し、*egin* が絶対格名詞句をとらない場合 (=D 2)
- e) X-ka が《X-ka + *egin*》を構成するものの、拒絶型か容認型か不明な場合 (=D 2 または D 3)

c) X-*ka* が一般的な副詞として機能する場合 (=D1)

このグループは、5.1 節 a) で観察した用例と同様に、X-ka が一般的な副詞として機能する場合である。

- [illegible]

(21) のダイアログでは、B の発話において、*egin* の絶対格補語である名詞句がない。しかし、直前の A の発話に不定詞 *grabatu* 「録画する」があることから、*egin* の補語はこの不定詞であり、それが省略されていると考えることができる。この場合には、*X-ka* は一般的な副詞として動詞を修飾しており、*egin* に必須な要素ではない。

20 (21) の *diat* および *diagu* で標示されている DAT は、発話の聞き手の人称を表すものである。このように、聞き手の人称が助動詞の活用に反映される現象は、バスク語の一部の方言で観察される。(King, 1994: 408)

21 I. Zaldua, *Biodiskografiak*, 2011, Erein, p.49. [EPD コーパス]

- d) X-ka が《X-ka + egin》を構成し、egin が絶対格名詞句をとらない場合 (=D 2)

このグループに含まれる X-ka は、egin の絶対格補語スロットを埋めているようにみえる。

- (22) [...] atximur -ka egi-n zidan gerri alde = an [...] ²²
 つねり する-PRF AUX 腰 あたり = SG.LOC
 ABS (3 SG)
 ERG (3 SG)
 DAT (1 SG)

「彼が私の腰のあたりをつねった」

例として (22) を分析する。まず、この例文の意味を確認すると、「つねる」というイベントには、3つの指示対象がかかわっている。助動詞 *zidan* に反映されている ABS (3 SG) と DAT (1 SG) は、それぞれ、つねる人と、つねられる人を表している。また、*gerri alde* 「腰のあたり」はつねられる場所を表している。

次に、これら3つの参加者の格標示について考えると、いずれも絶対格で標示されていないことがわかる。*egin* は他動詞であり、通常は絶対格補語を要求することを考慮すると、このことは一般的な格付与から逸脱している。

そこで、(22) に絶対格名詞句が不在である理由について、本稿では *atximurka* が *egin* の絶対格補語スロットを埋めているからであると考え。このとき、*atximurka* に絶対格語尾が後接しないため、形態論的には動詞の補語のようにみえない。しかしながら、*egin* の絶対格補語スロットを埋めているという意味で、統語的な補語の機能を果たしている。

この考えの妥当性は、(22) を (23) と比較することでより強まる。

22 E. Rodriguez, *Katu jendea*, 2010, Elkar, p.50. [EPD コーパス]

- (23) [...] *masail = a atximur -ka -tu zuen* [...] 「彼は頬をつねった」²³
 頬 = SG.ABS つねり VRBZ.PRF AUX
 ABS (3 SG)
 ERG (3 SG)

(23) は「つねる」というイベントを表すという点では (22) と同じだが、*atximurka egin* ではなく *atximurkatu* 「つねる」という一語動詞が使われている。この動詞は *atximurka* に動詞化接尾辞 *-tu* を後接することで得られる動詞である。

さて、ふたつの例文を比較すると、(22) ではつねられる場所が LOC 標示されているのに対して、(23) では絶対格標示されていることがわかる。*atximurka egin* と *atximurkatu* は、同一の形態素 *atximur* から派生した表現であることから、格付与パターンが意味的に異なるとは考えにくい。むしろ、*atximurka* が統語論的に *egin* の絶対格補語としてふるまっていると考えの方が妥当であると考えられる。

本稿では、(22) の *atximurka* のように、*egin* の絶対格補語スロットを埋めているように思われる用例を「拒絶型《X-ka + egin》」と呼ぶことにする。同様の特徴を示すと思われる X-ka の例として、(24) が観察された。

- (24) *atximurka* 「つねって」、*kirika* 「待ち伏せて」、*zirika* 「挑発して」、
atzamarka 「ひっかいて」、*tiraka* 「引っ張って」、*tantaka* 「したた
 けて」、*musuka* 「キスして」、*txapaka* 「棒で殴って」

(24) は、(22) の *atximurka* と同じように、*egin* の絶対格補語スロットを占めていると考えられる X-ka のリストである。これらの語もまた拒絶型《X-ka + egin》を構成すると考えられる。

- e) X-ka が《X-ka + egin》を構成するものの、拒絶型か容認型か不明な場合
 (=D2 または D3)

このグループは、X-ka が《X-ka + egin》を構成するものの、それが容認型《X-ka + egin》なのか、あるいは拒絶型《X-ka + egin》なのか判断のつか

23 E. Rodriguez, *Bihotz handiegia*, 2017, Susa, p.68. [EPD コーパス]

ない用例群である。例として (25) を分析する。

- (25) *la bota -ka egi-n du, tripa = ko min = ez* [. . .]²⁴
 ほとんど 吐く する-PRF AUX 腹=GEN 痛み=INST
 ABS (3 SG)
 ERG (3 SG)

「おなかの痛みで吐きそうだった」

(25) は、絶対格名詞句がないことから、容認型《X-ka + egin》であるか否かが不明である。その一方で、(25) が拒絶型《X-ka + egin》であるか否かも、この用例からは判断できない。なぜなら、意味的に絶対格補語であるものの、*botaka* と共起しているために斜格標示されているような名詞句もないからである。

6. 考察

第5節で分類した a)～e) を、第4節で示した仮説 (D) の分類にあてはめると、(F) のように分類される。

(F) 仮説 (D) の分類と、分析結果の対応

(D 1) : a), c) X-ka が一般的な副詞として機能する場合

(D 2) : d) 拒絶型《X-ka + egin》

(D 3) : b) 容認型《X-ka + egin》

(D 2) (D 3) のいずれか : e) 拒絶型か容認型か不明な《X-ka + egin》

まず (D 1) は、X-ka が一般的な副詞として機能している場合であり、このグループには a) および c) が含まれる。この際、X-ka は動詞の修飾語として機能し、その生起は義務的ではないため、(D 2) (D 3) と比べるとより副詞らしいといえる。

次に (D 2) は、X-ka が統語的に egin の絶対格補語としてふるまう場合であり、d) の用法が含まれる。X-ka に絶対格語尾が付くことはないため、

24 M. Antza, Atzerri, 2012, Susa, p.134. [EPD コーパス]

X-ka の形態論的なふるまいは名詞らしいとはいえない。しかしながら、*egin* の絶対格補語スロットを占めるという意味において、統語的な名詞らしさを示しているといえる。

(D3) には、b) の容認型《X-ka + *egin*》が含まれる。この用法については、X-ka が *egin* の絶対格補語スロットを占めないことから、(D2) ほどは名詞らしくないといえる。また、(D3) と (D1) を比べると、(D3) は (D1) ほど副詞らしくないといえる。なぜなら、後者の X-ka は生起が義務的ではないのに対して、(D3) の X-ka は *egin* の必須要素であり、生起が義務的であるからである。

最後に、(F) の「(D2) (D3) のいずれか」には、e) の用例群が含まれる。このグループの用例がどちらのタイプであるかを判断するためには、当該の例文に絶対格名詞句を加えた作例を用意し、容認度をテストすることが必要である。しかし、本稿はコーパス調査のみであるため、あえて分類しない。

7. 結論

X-ka は品詞分類の困難な語である。先行研究においては、しばしば副詞と定義されているものの、その統語的特徴ならびに意味的特徴を考慮すると、かならずしも副詞とはいえない。X-ka の品詞分類についての議論を深めるためには、この語の副詞らしくない特徴を、様々な文脈において記述することが必要である。

本稿では、X-ka が *egin* と共起する用例を分析することで、一般的な副詞の定義から逸脱した X-ka の特徴を明らかにすることをこころみた。その結果、X-ka には次の3種類の用法があるという結論を得た。

- (i) 一般的な副詞としての用法
- (ii) X-ka が *egin* の絶対格補語として機能する拒絶型
- (iii) X-ka が *egin* の絶対格補語スロットを占めることなく、*egin* の必須要素として機能する容認型

また、(ii) (iii) について、先行研究では両者の区別がなされておらず、あたかも同一の構文であるかのように扱われている。しかし、本稿の結論は、前者の構文において X-ka の統語的特徴が一樣ではなく、2種類のクラスに区別されることを示唆するものである。

8. グロス記号

-	affix boundary	DITR	ditransitive	PL	plural
=	clitic boundary	ERG	ergative	POSS	possessive
1	first person	FUT	future	PRF	perfect
2	second person	GEN	genitive	PRT	partitive
3	third person	IMPRF	imperfect	REL.CL	relative clause
ABS	absolutive	IND	indefinite	RELV	relativizer
ALL	allative	INF	infinitive	SG	singular
AUX	auxiliary	INTR	intransitive	TR	transitive
COP	copula	LOC	locative	VRBZ	verbalizer
DAT	dative	NP	noun phrase	φ	zero morpheme

参考文献

- Acedo-Matellán, V. and A. Pineda (2019). Light Verb Constructions in Basque and Romance. In A. Berro, B. Fernández and J. Ortiz de Urbina (eds.), *Basque and Romance* (pp.176-220), Brill.
- Artiagoitia, X. (2012). The DP hypothesis in the grammar of Basque. In U. Etxeberria, R. Etxepare & M. Uribe-Etxebarria (eds.), *Noun phrases and nominalization in Basque : Syntax and semantics* (pp.21-77), John Benjamins Publishing Company.
- Etxepare, R. (2003). Valency and argument structure in the Basque verb. In J. Hualde and J. Ortiz de Urbina, *A Grammar of Basque* (pp.363-426), Berlin : Mouton de Gruyter.
- Euskaltzaindia (1985). Adberbioa. *Euskal Gramatika. Lehen Urratsak-I*, 309-346.
- Hualde, J. I. (2003). Adverbs. In J. Hualde and J. Ortiz de Urbina, *A Grammar of Basque* (pp.190-195), Berlin : Mouton de Gruyter.
- King, A. R. (1994). *The Basque Language. A Practical Introduction*. University of Nevada Press.
- Levin, B. (1983). Basque. *On the nature of ergativity*. Ph.D. diss., MIT, pp. 290-360.
- Martinez Etxarri, A. (2015). [*Izen + Egin*] a aditz-lokuzioak : inkorporazio mailak [Verbal Phrase “Noun + *egin*” : Level of Incorporation]. Ph.D. Diss., University of Deusto.
- Schachter, P. (1985). Parts-of-speech systems. In Tymothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description I : Clause structure* (pp.3-61). Cambridge : Cambridge

University Press.

手塚進 (2019) 「バスク語-*ka* 副詞の名詞的用法－動詞 *egin* 「する」の目的語位置を占める場合－」 SELE 2019 口頭発表, 2019 年 8 月 28 日.

資料体

EPD コーパス = Ereduzko Prosa Dinamikoa [Contemporary Dynamic Prose] 〈<https://www.ehu.eus/ehg/epd/>〉 [最終アクセス: 2019 年 12 月 18 日].

EH 辞書 = Euskaltzaindiaren Hiztegia [Dictionary of Basque Academy] 〈https://www.euskaltzaindia.eus/index.php?option=com_hiztegianbilatu&view=frontpage&Itemid=410&lang=eu〉 [最終アクセス: 2019 年 12 月 18 日].